

～取材を終えて～

郷に入れば郷に従え

学生記者 西村卓真(経3)

日本男子バレーボール界の期待の新星・石川選手はとても爽やかだった。

高校時代から全国的に名を知られ、大学進学後も順風満帆で、セリエA挑戦の話が舞い込んできた。「うれしかったですね。呼ばれた瞬間、行きたいと思いました」と当時の心境を語ってくれた。不安はなかった？ との愚問に「不安というよりむしろ楽しみでした」と答えた。さすがは若くして全日本に選出され、世界に挑んでいる選手だ。

石川選手の所属した『モテナ』はセリエAの強豪だ。チームには現役ブラジル代表キャプテンやフランスのエースなど各国の代表選手が集っている。若い選手が多かったようで、すぐチームになじめたという。

イタリアには「Do in Rome as the Romans do. (郷に入れば郷に従え)」という有名なフレーズがある。その土地やその環境に入ったならば、そこでの習慣ややり方に従うべきだ、という意味。

これは海外で生活する上で非常に大事なことではないか。その国の文化、習慣を理解する。彼は、これまでとは違った試合の雰囲気を知った。

イタリアの体育館は選手との距離が近く、アウェー戦では容赦ないブーイングを浴びた。

まるでサッカーの試合。同じバレーボールでも、日本ではステックバルーンをたたき、サーブでは時として観客が声を一つにする。

語学力の必要性も知った。バレーボールは団体競技。試合中に指示を受けたり、ボールを要求したりする。選手同士のコミュニケーションは必要不可欠だ。

かなり苦労したようで、「指示されているのは分かったけど、ああしたい、こうしたいというのは伝えられなかった。欲しいトスが要求できな



左から西村記者、石川選手、内藤記者

かった」。それでも言葉はだいぶ分かってきて、もう少しいたかったと悔しそうな表情をした。郷に入ったことで多くの新たな発見をし、より一層強くなった。

卒業後もトップアスリートとして活躍し続けるだろう。しかし、いつの日か競技生活に終りが訪れる。「日本人にとって大学っていうのは出ておいたほうが後々いいじゃないですか…。」その後の人生もしっかりと見据えているからこそ、勉強にも励んでいるのだろう。

2020年に東京五輪・パラリンピックが開催される。若手選手に多いのは、自国開催の東京五輪で頑張ります、という言い方だ。石川選手は来年のリオ五輪を一番の目標に掲げた。先を見据えることも大事かもしれないが、彼は目の前のことを一つ一つやっていくことで見えてくるものがあると考え。「リオ五輪の結果次第で東京五輪ではどうしなければいけないかという考えが生まれると思うので、まずはリオをどう戦うか」。強い意気込みが聞けて、とても頼もしく思った。

9月にはリオ五輪出場を懸けたワールドカップが日本で開催される。イタリア留学を経験して体も心もたくましくなった石川選手の活躍に今後も目が離せない。